

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 門間 卓也

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院総合文化研究科 地域文化研究専攻 博士課程

【研究題目】 社会主義ユーゴスラヴィアにおける「教育」と犠牲者ナショナリズム

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究は、社会主義ユーゴスラヴィアにおいてナショナリズムが高揚した原因の一つとして「教育」の政治的実践に注目しながら、クロアチアにおける「犠牲者ナショナリズム」の実像を明らかにすることを目的とする。

社会主義期の東欧諸国で、歴史教育が国民統合に係り大きな役割を果たしたことは疑いない。しかし社会主義ユーゴでは民族問題の再燃を回避するために、第二次大戦時のウスタシャ(クロアチアの対独協力者組織)及びパルチザンの蛮行に係る事実が一部隠蔽されていた。その公教育体制を利用しながら、クロアチアの民族知識人は自民族を社会主義体制の「被害者」に転換するような独自の民族史観に基づく「歴史教育」を実践したと考えられる。1971年にはその影響を受けた大学生層が先導者となって、共和国規模の民族運動「クロアチアの春」が発生した。本研究ではこうした歴史的な脈に照らしてクロアチア民族社会が「犠牲者ナショナリズム」を軸に凝集化を果たしたメカニズムを分析する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

社会主義ユーゴの建国期から「クロアチアの春」が発生する1970年代前半までを時期区分として、以下の様に検証する課題を分節しながらクロアチア民族知識人による「歴史教育」を通じた「犠牲者ナショナリズム」の構築プロセスを探求する。分析にあたり用いた史料はザグレブ(クロアチア)の文書館・図書館などで収集した。

## (1) 連邦/共和国規模の教育政策：社会主義イデオロギーに基づく「歴史の見直し」

ユーゴ共産党主導の教育政策に基づき、1956年にはクロアチア共産党組織内にイデオロギー部門が設立され、共和国の教育・学術機関における教育内容に係る統制が進められた。そこで同部門内で戦間期からの民族問題やウスタシャの枢軸協力及び「反共」の過去などに関する教育内容の「修正」がどのように協議・実践されたか分析する。

## (2) 「民族史観」の台頭：民族知識人の言論活動

社会主義ユーゴの「公式」の歴史観に対して1960年代よりクロアチア中央協会(民族文化教育を目的とした出版組織)やクロアチア労働運動研究所からは言語問題など民族文化の擁護に関する言説が盛んに表明されるようになる。そこで「民族知識人」サークル内で社会主義イデオロギーが自民族の文化ナショナリズムを抑圧しているとする「被害者意識」が表明される経緯を明らかにする。

## (3) 「クロアチアの春」と「犠牲者ナショナリズム」の構築・実践

1960年代後半からユーゴ全土で党指導部に対して政策は正を訴える学生運動が開始された。1968年には「プラハの春」がソ連による軍事的弾圧という結末を迎えたことで、クロアチア共和国全体で社会主義イデオロギーに対する危機感が強まっていた。その際クロアチア共産党員と「民族派知識人」、及び大学生層が「犠牲者ナショナリズム」を共有して社会主義ユーゴからの分離を唱えるに至ったメカニズムを分析する。

## 【結論・考察】(400字程度)

助成期間(2017年10月~2018年9月)では主に上記内容・方法の(2)にあたる1960年代の民族知識人の言論活動を分析した。特に1961年に設立されたF・トゥジマン(後の初代クロアチア大統領)擁するクロアチア労働運動研究所の歴史家グループの言説に注目した。当時ユーゴ共産党は第二次大戦中のジェノサイドの現場であるヤセノヴァツ強制収容所の被害者数を測定したが、被害者数を過度に見積って勝者たるパルチザンの英雄性と社会主義ユーゴの国家的正統性を堅持していた。対してクロアチア人歴史家は対独協力の「記憶」を作為的に扱う当局の対応を疑問視して「パルチザン神話」の民族主義的読み直しを図りながら、クロアチア国家の正統性を主張した。加えて「クロアチア独立国」崩壊時にパルチザンがブライブルグで行った市民虐殺への非難を強めている。クロアチア民族知識人はこうした第二次大戦時の「記憶」を自らの「犠牲者性」に基づき再解釈することで、ナショナリズムを急進化させて社会主義体制への対抗姿勢を掲げるに至った。